

王子様なんていない!

Chibiro & Lucas

椎崎ゆうり

Yuri Shizaki

eternity



エタニティ文庫

C o n t e n t s

王子様なんていない！ 5

バレンタインは王子様と 275

王子様なんていない！

第一章

——ティーン・トーン

と、よく言えば柔らかな、率直に表現するならどこか間の抜けた音が耳に届く。

間を置かず、残暑で暖められた生ぬるい空気と楽しげな声たちが、いつそ寒いほどに冷房の効いた室内へと流れ込んできた。

その声があったの雑音からはつきりとした言葉に変わるのを待って初めて、木下ちひろはたった今まで睨み付けていたパソコンのモニターから視線を上げた。

腕時計を見れば、針は十五時を少し回っていた。

新緑色のロゴを大きく貼り付けた自動ドアを潜り抜けて入ってくるのは、今年の春からちひろの勤める英会話スクールに通い始めた、カジュアル系にギャル系と、タイプのまったく異なる女子大学生二人だった。

彼女たちは入会の説明の際からちひろがほとんどつきつきりで担当した事もあつてか、顔を合わせる度に気軽に声をかけてくれ、ちひろとしても接しやすい生徒さんたちである。

受付へと目を向けると、ここ数十分乗客がなかった事もあつて誰もいない。席を立とうとしている人はいないだろうかと、つい昨日パーマを当て直したアッシュブラウンの髪を耳にかけてつつ周りを見回すけれど、みんなほんの一瞬だけ自分のモニターから視線を上げただけですぐに自分の作業に戻ってしまう。

どうやら自分の他に手の空きそうな——というか、空けようとする人はいないようだ。(まったく、みんな腰が重いんだから)

目を軽く吊りあがらせつつも、「仕方ないか」と口の中で小さく諦めの言葉を吐く。右手できゅきゅつとマウスを動かして、ついさっきまで頭を悩ませていた講師のシフト表をひとまず保存した。

ちひろが勤務しているのは、CMなどで全国のお茶の間にもおなじみの某大手英会話スクールの東京本校だ。

大学時代に一年休学してオーストラリアでワーキングホリデーをした事がきっかけで英語にのめりこんだ彼女は、少しでも英語に触れていられる就職先を、との希望が叶い、このスクールへの内定をゲットしたのだ。

こうして東京本校に勤める事ができたのもラッキーだった。

複数の鉄道路線が乗り入れる主要駅から徒歩数分圏内に位置している事もあり、首都圏内に数多く存在する教室の中でも有数のレッスンスペース数と生徒数を誇っている。その分仕事は忙しいしノルマも厳しいけれど、やりがいというものを如実に感じられる。

オープンで友好的な雰囲気を狙ってなのだろうか。ちひろたちが通常業務を行うオフィススペースとエンタランスは、胸の高さの受付カウンターと、スクールの理念がスタイリッシュにデザインされたパネルで仕切られているだけだ。

おかげでこの教室に配属された当初はあまりの開放感に戸惑ったばかりか、受付カウンターのそばを人が行き来する度に気が散ってしまい、仕事に身が入らず困っていたものだ。

まだレッスンの少ない午前中や午後の早い時間はそうでもないのだけれど、午後の遅い時間——大学や高校が終わる時間を過ぎると、ひっきりなしに訪れる生徒さんたちやレッスンスペースと講師待機室を行き来する講師たちの存在が、あまりにも煩わしくてヒステリーを起こしそうになった事は一度や二度じゃない。

だから、理解はできるのだ。忙しくなる直前のこの時間に、できる限りの作業を終わらせておきたいというみんなの気持ちは。

もう一度、今度は心の中だけで「仕方ない」と呟くと、ちひろは席を立って、未だ無人の受付に向かう。

カウンターの手前で足を止め、ほとんど条件反射的に笑顔を作って下腹部に力を入れた。

「飯田さん、沖野さん、こんにちは！」

「あ、こんにちはー」

「木下さん、こんにちはー」

お腹から声を出して挨拶をすれば、気持ち良いくらいに元気な声が返ってくる。

「あはは、沖野さんはいつも元気いいですよ。今日も外、暑くなかったですか？」

「えー、めっちゃ暑かったですよー。あたし、エアコン発明した人、マジソンケーするし！ ってかその人いなきゃ、多分暑さに負けて生きていると思う……」

へちゃりとカウンターに突っ伏す沖野の盛りに盛った髪を崩さないように気をつけながらも、飯田はよしよしとあやすように彼女の頭をなでる。

「大丈夫、大丈夫。志穂は強い子だもん。エアコンとか扇風機とかなくてもちゃんと生きていけるよー」

「いやいやいや、絶対無理だつて。ほら、あたしむっちゃセンサイだし！」

「そっかな。あたし、志穂は地球温暖化で日本が沈んだり、氷河期が来たりしても全然大丈夫な気がするよ？」

ほんわりした口調でさつくりと吐き出される、持ち上げてるんだか突き落とそうとし

てるんだか分からないコメントをする飯田へ、沖野はじつとりとした視線を向ける。

「……あい香さあ、マジであたしの事、何だと思ってるワケ？」

「ん？ 志穂は志穂だよ？」

「そうだよなー、あい香はあい香だもんねー」

「うん、そうだよ」

どうしてそんな当たり前の事を訊くの？ と、表情だけで問い返してくる友人に、沖野は疲れたように息を吐く。

お互いに気を許し合っている友人だからこそ許される暴言交じりの会話は、聞いてる分には純粹に楽しい。失礼にならない程度に、と気を付けつつ、ちひろはそつと笑いをこぼす。

「あはは、お二人とも、相変わらず仲がいいんですねー」

「えー……ねえ、あたしたち仲いいのかなあ？ 志穂はどう思う？」

「あのさ、そこは普通に肯定しようよ」

天然なのかDなのかこれまた分からない飯田に盛大なため息をついて、ようやく沖野はよっこらしよ、と年齢に似合わない掛け声と共に身を起こした。

そのまま肩にかけているブランド物のショルダーバッグを無言で探り出すところを見ると、飯田の相手は諦めて、現実的な行動をとる事にしたらしい。

沖野の様子を眺めていた飯田も、自分のカバンの中から財布を取り出す。

「えーと、チェックイン、してください」

「お願いします」

わずいと差し出されるカードを一枚ずつ、きちんと両手で受け取る。

「はい、それでは会員証をお預かりしますね」

受け取ったカードの表面に刻印されている会員番号を確認しながら、カウンター内のパソコンの数字キーを打つ。

どうせなら、磁気テープなりバーコードなり導入してこのひと手間を何とかしてくれたいのに、など何度も繰り返してきた文句を脳裏に浮かべつつ、入力し終えた番号と会員番号を再確認してエンターキーを押す。数秒後、直近の予約状況が一覧表示された。

ディスプレイ上の名前を再確認してから「チェックイン」をクリックし、映し出された内容をそれぞれ読み上げた。

沖野はカウンターのメモ用紙に備品のペンで走り書きをして、飯田はファンシーな手帳に自分のペンできちんと書き込む。こんなところにも二人の違いが見えてちよつと楽しい。

チェックイン手続きはこれで終わりだけれど、生徒さんたちがレッスンスプースに向か

うのをきちんと見送るまでがお役目だ。

パソコンの画面を初期画面に戻しながら動こうとしない二人をふと見れば、お互いに視線を交わしつつそわそわと落ち着きのない様子を見せている。

その様子で、ピンときた。

(あー、そっか。この子達もだっけ……)

彼女たちが何を気にしているのか気づいたものの、あえて知らないふりを続ける。

しばらく経ってから、それでもやっぱり覚悟を決めたのか、ほんのりと頬を染めた飯田が「あの」と声をかけてきた。

「今日はルーク先生、授業ないんですか?」

ほらやっぱり、と内心で呟きながら、ちひろは手元のマウスを動かしてパソコンで講師のスケジュールを確認するふりをする。

あくまで「ふり」な理由は実に単純明快。この質問は、数えるのも億劫おっくうになるくらいひどの頻度で投げてこられるものなのだ。訊かれるたびに一々調べるのもうっとうしい。だから出勤してすぐ『ルーク先生』のスケジュールを確認して頭に入れ、いつでも答えられるようにしている。

けれど『ルーク先生』の予定をちひろが把握している、なんて事が知られたら軽く騒動が起りかねない。だから、面倒くさくてもわざわざこんなジェスチャーをしている。

「ルーク先生ですか? ええと……あ、授業はあるようですね」

「マジ!? ねえ、ルークも来てる!」

とたんに勢いづいて訊ねてくる沖野に押されかけながらも、ちひろは営業スマイルを保ちつつ首を横に振った。

「いえ、まだいらしてませんよ。ですが本日は、次の次……十六時二十五分からレッスンをお持ちなので、それまでにはいらっしやると思います」

もったいぶりつつ小出しに情報を与える度に、一喜一憂する彼女たちは可愛らしいとちひろは思う。

けれど実は同時に、騙されている彼女らに対して哀れみも感じている。

彼は、かつして彼女らが思っているような人物ではない。けれどこのスクールでそれを悟っている女性は、きっとちひろ一人だろう。

「うわっ、そうなんだ!? ねえねえどうする? レッスン始まるぎりぎりまでここで待つ?」

「えー、でも、ここで待つてるとか、迷惑になっちゃうよー」

迷惑になる、と口にしながらも、飯田はこれっぽっちも動く気配を見せない。という事は、どうやらアイドルファンよろしく「入り待ち」をするつもりらしい。

(まあ彼は実際、うちの教室のアイドルみたいなものだもんね……)

大学時代の接客系アルバイトを含め通算六年かけて体得した、ちひろの鉄壁営業スマイルにわずかに苦笑の色がにじんだ。

彼女らが話題にしている『ルーク先生』ことルーク・カス・コーンウェルは、一年と少し前からちひろの勤める東京本校で常勤で働いているトロント出身のカナダ人講師だ。

社員であるちひろは英語で彼と話すことはあるものの——というか生徒の前で講師と話す時は、社員といえど英語で話すことが義務づけられているのだけ——当然ながら彼のレッスンをきちんと受けた事はない。けれど定期的に行われるアンケートの集計によると、評価はとて高く、校内でも人気講師の一人になっていることが分かる。

低い声ながらも発音がクリアで言葉の一つ一つが聴きやすい、生徒がどこの部分を理解していないのかを的確に掴み、図解するなどして納得できるまで懇切丁寧に説明してくれる、などといったコメントが、アンケートの評価欄ではよく見られる。

実際会話していると、ちょっととしたアドバイスをしてくれる事があるのだけれど、言葉の語源だとか本来の意味、使い方をきちんと説明した上で、「このような時はこういう風に言った方がいいですよ」と、押し付けるのではなく新たな選択肢の一つとして差し出してくれる。そのせいで、頼んでもいないアドバイスでも、すんなり受け入れてしまふのだ。

——けれど、単に教え上手なだけでこんな風にファンが付くはずもない。

その理由を一言で片付けるなら、ルークは彼を見た十人が十人とも、男女を問わず口を揃えて「英会話講師しているなんてありえない！」と叫ぶくらいの美青年なのだ。

平均的な日本人と並べば簡単に頭一つ飛び出る百八十七センチの長身を持つ彼は、その身長からすれば若干痩せ気味に見えるものの、骨格がしっかりしているせいかな、なよつとした中性的な雰囲気はまったくない。

その髪は秋の午後の日差しを思わせる黄金色で、少し長めに整えられたそれは柔らかかに波打ち、まるでライオンなたてがみのように顔の周りを縁取っている。

まっすぐに筋の通った鼻梁からきりつと雄々しく太い眉のラインにかけては、まさに翼を広げた鷲を思わせる。その両翼の下、アジア系人種にはありえない深さで彫り込まれたアーモンド形の目には、新緑色の瞳がはめ込まれている。

優雅なカーブを描く薄い唇は常に静かな笑みをたたえていて、対照的に鋭角を描く顎には無粋な髭どころか剃り跡すら見受けられない。

ちひろのように英会話スクールなどに勤めていると、当然ながら多くの外国人と出会う。その中には「モデルでもした方がよっぽど稼げるよー」なんて下世話なアドバイスをしたくなるような美男美女も少なからずいる。

そう、ただ見た目がいいだけの男性なら、国籍を問わずいくらでも見つける事ができる。

けれどルークの場合は「実はヨーロッパのどこかの国の貴族だとか王族だとかの血を引いているんです」と言われても、「ああうん、やっぱりそうだったんだ」と素直に納得できるだけの何かがあった。

そんな風に思わせる要因の一つは、時に古めかしくすら聞こえる言葉づかいと優雅な物腰のせいだ。

一般的な現代人——特に男性は、どんなにがんばって取り繕っても、その言動の端々に乱暴な部分が見え隠れしてしまう。けれどルークのそれは、見た目を少しも裏切らず実に流麗なのだ。それも、小さな頃からそういつた躰しげを受けてきたのではないかと思わせるほど自然に。

そして、その見た目と物腰にふさわしい深く響く柔らかな声も、彼を知る女性たちの心を捕まえて離さない要因の一つだ。

それらの要素が重なった結果、ルークは周囲から『スクールの王子様』だとか『貴公子』だとか呼ばれ、騒がれている。

実際ルークがこの教室に勤め始めた当初は、社員や講師を含むほとんどの女性が彼へと盛大に熱を上げ、「ルークの彼女の座・争奪戦」とも言える争いを繰り広げたりもしたのだ。

けれど、彼はごく一部の例外を除いた全ての女性に、どこまでも誠実に平等に接し続けた。

そんな風にきつぱりと「僕は君たちの誰にも特別な興味を持っていません」と態度に表され続けているは、一気に過熱したオトメ心もじわじわとその火勢を弱めざるを得なかったらしい。

もちろん、玉碎覚悟で告白をした女性も少なくない。

けれどそんな彼女らに対しても、彼はきつぱりと、しかし不用意に傷つけすぎないように心を尽くして対応するそうだ。聞くところによると、「あなたの気持ちはとても嬉しいのだけれど受け入れる事はできないのだ」という事を、相手が納得するまで穏やかな言葉で伝えるのだとか。

中には「一度だけ寝てくれたら諦めるから」とホテルに誘った人もいるらしい。けれどその時ですら、「自分をそんな風に貶おとめないでほしい」という内容の言葉で説得したという。

そういった態度のおかげか、どんなに彼に熱を上げていた女性も今ではすっかり落ち着き、他のみんなと一ファンとしての節度を守りつつ、きゃあきゃあと騒いで満足しているのだから尋常じゃない。

今日の前にいる女子大生二人組も同類のようで、英語学習のためだけでなく「ルークに会いたい」との願望もあり、入学から半年以上が過ぎててもペースを落とす事なく通

い続けている。

見た目や先入観で人を判断してはいけないというのは分かっている。けれど正直なところ、飯田はともかく熱しやすく冷めやすいといった様子の沖野は、きつとすぐに通ってこなくなるだろうと思っていたのに。

そう考えると、『ルーク効果』ってすごい、とちひろは改めて感心してしまう。同時に、ルークを東京本校の常勤講師に据えた本社の「ある意味」的確な判断には、素直に賞賛の拍手を送らざるを得ない。

通常であれば、一つの教室で固定して教える常勤講師になるには、英会話講師としての経験が長く、また日本人と結婚している、もしくは結婚の予定があるなどの理由により、数年単位での長期勤務が可能である事が条件だ。

しかしながらちひろと同じく二十六歳のルークはキャリアも短く、まだ結婚をしていないばかりか、日本人の婚約者がいるわけでもない。

つまり、ルークが常勤講師となっているのは、普通に考えればありえない話なのだ。

一応表向きには、彼がカナダで大学生をしていた頃の、留学生に対する語学サポートや個人指導をしていた経験が買われたためとなっているが、それだけではこの特別待遇の説明がつかない。

社員たちの間では、ぶっちゃけた話、本部はルークを生徒——特に女性の——を引き

付け、繋ぎ止める餌^{えそ}、もといマスコットにしよう^{しよう}と目論^{もくろ}んでいるのだと公然^{こてん}と囁^{ささ}かれていた。

事実、彼が体験入学を引き受けた女性客の入校率^{れいこうりつ}を考えるに、『ルーク効果』とやらは確かなものだ。

それどころか、クチコミで彼の存在を知って通い始めた生徒や、話を聞きに来た際に彼を見て入校を決めた女性も多い。そのため、ちひろも彼の影響力の凄まじさを洩々ながらも認めているのだ。

BGMとして低音量で流されているリラクゼーション系の音楽に、ティン・トーンと新たな来客を告げる電子音が重なる。

うっかり思考の海に沈みかけていたちひろは現実へと立ち戻る。そしてほとんど反射的に笑みを顔に貼り付け、ガラス張りのドアへ視線を向けた。

——とたん、貼り付け直したばかりの笑みにびしりとヒビが入る。

ちひろの視線の先にいたのは、黄昏近い午後の黄金の日差しを背負い、外の暑さにもかかわらず涼しげな顔でスリーピーススーツに身を包んだ貴公子だった。

あまりのタイミングのよさに、『Talk of the devil (悪魔の話)をすれば悪魔が現れる』——すなわち噂をすれば影、という慣用句がちひろの脳裏をよぎる。

それは沖野と飯田も同じだったようだ。二人は一瞬呆気にとられたかのようにぼかんと彼——ルークを見つめる。そして。

「……っ、ぎゃ——！　なんで？　え、マジでルーク!?」

「志穂、落ち着きなつてば！　えーと、えーと、は、ハウアーユー？」

まさに今、話題にしていたその人を目の前にして、沖野は驚きと緊張のあまり挙動不審に陥り、飯田はそんな友人の腕にしがみついて注意しつつも、ただただしい英語を口にする。

沖野の勢いに目を眩りながらも、飯田の挨拶を耳にした彼は、まさしく『貴公子の笑み』と称されるに相応しい、綺麗すぎるほどに綺麗な笑顔を若者たちへと向けた。

「そちらにいらっしやるのは、シホとアイカですね。ありがとう。僕は元氣です。君たちのご機嫌はいかがですか？　今日は少しばかり暑すぎるくらいがあるけれど、とても気持ちのいい晴天だと思いませんか？」

すつと背筋を伸ばすと胸に手を当て、ゆっくりと頭を下げる。

あまりにも板についたルークの『王子様』な態度に、背中を何かぞわぞわしたものが走り抜けた。出会って一年以上経っているというのに、ちひろはそんな彼の態度にどうしても慣れることができない。

英語を聞き慣れない耳にもクリアに言葉を届けるのは、チェロのように深く響く張り

のある声。その声が奏でるのは、ちひろが『王子様トーク』と呼ぶ、比較的簡単な単語のみを使いながらも洗練された言い回しで紡がれる言葉たち。

挨拶をした後は、確実に二十センチ以上は低い位置にある彼女らの目線をまっすぐ受け止めるために、ぴんと伸ばされている背筋を腰から屈めて覗き込むようにしている。

そんな風にして語りかけられてしまつては、耐性の足りない女子大生たちは、ぼうつと顔を赤く染めてうっとりとして彼を見つめ返すしかできない。

（なんていうか、あれはいっそ拷問じゃない？　もう、本気で可哀想になつてきた……）

幸せそうではあるものの、完全に石化してしまつている二人からは、いくら待つても返事らしい返事は得られないようだ。彼も気がついたらしい。

「大変申し訳ないのですが、僕はそろそろ行かなければなりません。また後ほどお話ししましょう。」

そう会釈をしてルークは受付カウンターの方へと向き直る。そのエメラルド色の瞳が受付に立つ人物——つまりちひろを認めた瞬間、明らかに煌きを増した。

（しまった、失敗した。——ったく、何をぼうつと突つ立つてたのよあたしつてば！）

さつさと自席に戻つておけばよかつたと思う。しかし受付前に生徒さんを置いて立ち去る事は許されていない。だからこうなつてしまったのも、ある意味必然だったのだろう。たつた今まで相對していた女子大生たちの存在を綺麗さっぱり忘れてしまつたかのよ

うに、ルークはちひろだけを見つめている。そのままエレガントさを失わないぎりぎりの早足で受付へと向かってくる彼を見て、口元が引きつった。

普通の時でもきらつきらかな笑顔が、さっきまで飯田と沖野に向けられていたものより、も更に嬉しげかつ楽しげなものになっている。いっそ後光が差してないのが不思議なくらいの、魅力を全開にした満面の笑みだった。

(だーからー、本当にやめてってばー！)

今すぐにも背を向けて逃げ出したくなる衝動を必死で抑えつつ、ちひろは強張っている表情筋を何とか動かして、ぎくしゃくと挨拶の言葉を口にする。

「こ、こんにちは、ルーク」

「やあ、チヒロ。昨日ヘアサロンに行かれたようですね。以前の髪型も君らしくてよかったですと思うのだけれど、新しい髪形も華やかでも似合っていますよ。ところで、本日はご機嫌のほどはいかがですか？」

「えっと……まあまあです」

そう返せば、ルークはちひろをじつと見つめたまま、凛々しい眉をわずかにひそめた。こんな事を指摘して、もしお気に障りましたら申し訳ありません。ですがチヒロ、以前にも指摘させていただいたかと思うのですが、「まあまあ」という表現を多用するのは、英語圏ではあまり好ましく思われません。特に会話の糸口となる挨拶でその表現を

使ってしまうと、そこで言葉のやり取りは断ち切られてしまいます。日本人に限らず、英語を他国語として学習してきた方々は、学校の授業などで教わる事が多いせいか、変に使い慣れてしまいがちです。しかしその表現ばかりを用いては、会話相手に対しておごなりに返しているように取られてしまいかねません。もちろん、そういうつもりで使っているわけではないのでしょうか。ですが会話の相手にそのように思わせてしまうのは、君の本意ではないとも思うのです

「……確かにそうね。ごめんなさい」

思いがけず真剣な顔で諭され、ちひろの中で罪悪感がむくりと頭をもたげる。

なんでもいいからとりあえず返事をしておけばいい、という気持ちも少なからずあったのを見抜かれた気がした。

「いえ、チヒロは何も悪くありません。僕も少しばかり言葉が厳しかったように思います。ですが決して怒っていたわけではないのです。もしも君に誤った印象を与えてしまったのでしたら、申し訳ありません」

わずかに目を伏せて謝罪の言葉を口にしたルークは、しかし再びちひろをその緑色の瞳に映して柔らかに微笑む。

「では、もう一度やり直しましょう。——やあ、チヒロ。ご機嫌はいかがですか？」

まるで子供の遊びみたいだと思わないわけでもない。けれど適当に言葉を返した事に

対する後ろめたさもあって、この場は付き合うべきだろうと判断する。

ほんの少し言葉に迷いながらも、ちひろは会釈と共に挨拶を返した。

「こんにちは、ルーク。今日もいつもと同じで、仕事がたくさんあって忙しいです。」
 「上出来です、チヒロ！」

心の底から嬉しそうに目を細める彼の様子に、不本意ながらも嬉しくなってしまう。

どうやら彼は褒めて伸ばすタイプの講師らしい。説明の仕方といい、褒めるタイミングといい、実に巧みだ。確かにこれなら講師としての人気が高くて当然かもしれない。

——などと見直したのも束の間。

「正直なところを申し上げますと、君が僕に会えて嬉しいと返してくださいましたのならば、きつと最高に嬉しく思ったことでしょう。ですがさすがにそれは、少し高望みだったようですね。」

茶目つ気たつぷりに付け加えられた言葉に、ちひろの頬がひくりと引き攣った。

「……毎日顔を合わせてるのに、どうして喜ばなきゃならないんですか？」

「ああ、チヒロ。どうして君はこうも僕につれないのでしょうか……。」

うっかり漏れた本音に、ルークの笑顔がわずかに曇る。しかしほどなく気を取り直すと、彼はまたあのさらさらした笑顔を向けてきた。

「けれどチヒロが僕を出迎えてくださった事を、とても嬉しく思います。もしかして、

僕が来るのを待っていてくださったのですか？」

「残念ですが、ただの偶然です。飯田さんと沖野さんの受付をしているところにあなたが来たんです。」

自意識過剰なセリフへと反射的にぴしゃりと切り返すものの、ルークはそう簡単には引いてくれない。

「鋭い蜂の針を持つ君の言葉は、驚くほどの確に僕の心を弱らせてしまう。……ねえ、チヒロ。せめてもの慰めに、君の笑顔を見せてはいただけませんか……？」

「——営業スマイルでよければいくらでも見せますよ。」

言葉通りに、某ファストフードよろしくゼロ円スマイルを作ってみせれば、さすがのルークも傷ついた顔になった。

きつとちひろは、少しばかり現実的すぎるか、ロマンス度とかオトメ度といった何かの極端に低いのだろう。普通の女性であれば、ルークみたいな『王子様』的男性にこんな風に接されたなら、その気がなくてもぐらりと揺れてしまうはず。

なのにちひろは、どうしてもルークの『王子様』な態度に不自然さを覚える。それどころか、いつそ胡散臭く感じてしまうのだ。

日本語と違って厳密に敬語という観念が存在しない英語において、丁寧な言い回しを使いこなすのはなかなか困難な事だ。

日本語でも敬語を完璧に使えていないという絶対の自信があるちひろからすれば、英語で丁寧な話せるルークには素直に感心しているし、スマートな振る舞いに見惚れる事もないわけじゃない。

ないのだけれど、なんというか、あまりにも完成されすぎているせいで、逆に嘘臭く思ってしまうのだ。まあ、ホストのように誰彼構わず媚を売ったりしないだけマシなのかもしれない。

「ルーク、ブロークンハートアゲイン？」

くすくすと笑いながら問いかけた飯田へとルークが振り返る。そしてとても哀しげな表情を作り直すと、口元を片手で覆い隠しながら頷いた。

「ええ、まさにその通りです。哀しい事に、僕のチヒロへの想いは彼女に届く事はなく、彼女の僕を嫌う気持ちは揺らぐ事がないようです」

まるで詩でも読むかの様な口調で紡がれたその言葉を聞き捨てる事はできなかった。誰も、嫌いだとまでは言ってません！ 私はただ、あなたに関心がないだけです」

反射的に切り返した後ではっと口を押さえるものの、時すでに遅し。こんな醜態をお客さんである生徒さんたちの前で見せるなんて、社会人としても営業に携わる身としても失格だ。

しかもこの展開では、どう考えてもちひろが悪者だ。特に、ルークが分かりやすく傷

ついた顔を作ったりしている今は、言い訳のしようがない。

（ああもう、またやられた……!）

結局のところ、自分はルークの手のひらの上で転がされているオモチャなのだと思改めて思い知る。ゆっくりと深呼吸して冷静さを取り戻すと、ちひろは冷ややかに言葉を続けた。

「それ以前に、今は仕事なんです。あなたのお遊びに付き合っている暇はありません。ああ、そうでしたね。おっしゃる通りです。僕としてはお仕事の邪魔をするつもりはなかったのですけれど、こうして一番にお会いできた事で少しばかり浮かれてしまったようです。僕もレッスンの準備がありますので、そろそろ失礼させていただきます。申し訳ありません、と実に真摯な表情で謝罪の言葉を口にして、ルークはさっと踵を返すと講師待機室へと向かって歩き始める。

その背中を思いつきり睨みつけるちひろの袖を、いつの間にかカウンターまで戻ってきていた沖野がつんつんと引っ張った。

「……どうかされましたか？」

「木下さんさあ、そろそろルークに落ちてあげようよお。さすがに可哀想だよー」

「可哀想って言われても、無理なものは無理ですのよ」

再びカウンターに懐きながらじっとりとした目で見上げてくる沖野に、ちひろは反射

的に返していた。

瞬間、背後でがたつ、と何かがぶつかったような音がした。

咄嗟とつさに振り返ると、待機室の入り口を遮る様に並べられている、背の高い鉢植えの後ろへと姿を消すルークの背中が一瞬見えた。どうやらどれかの鉢にぶつかったらしい。

あちゃあ、と内心で呟く。

あれは、絶対聞かれた。

視線を戻した先に今にも泣き出しそうな顔をしている沖野を見つけ、わずかに狼狽ろうはいする。

「ねえ、どうして無理とか言うの!? ルーク、あんなにも木下さん大好きなのに!」

「ちよっと志穂! やめなつてば! 木下さんに迷惑でしょ!」

「だってこんなの酷いじゃん! ルークが可哀想すぎるよ!!」

ルークに同情して感情的になる沖野は、きつといい子なのだろう。だけど今のちひろには、正直彼女のまっすぐさが痛かった。

公おとこの場でこんな話をさせないでほしいと思わなくもない。けれど、このままでは沖野は納得してくれないだろう。それに、無関係とはいえ誰かを傷つけてそのままにするというのは、ちひろの本意ではないのだ。

ほんの少し声を低めて、今にも泣き出しそうな顔になっている沖野をまっすぐに見つ

めた。

「イヤなところを見せてしまつてごめんなさい。でもあたし、ルーク先生みたいな人はどうしても駄目なんです。なんていうか、生理的に合わなくて……」

「そう、なんだ……」

「それにね、ルーク先生、あたしの事本気じゃないですよ。あたしみたいな反応する人が珍しくて、からかって遊んでるだけなんです。だから気にしちゃ駄目です」

真剣な顔になってそう告げると、ちひろの言葉に納得しかけていた沖野の顔が、また険しさを増した。

「は? それ、本気で言ってる?」

「……木下さん、実は結構天然さん……?」

心の中で天然認定していた飯田に「天然」と言われ、ほんの少しへこみつちひろは沖野の言葉に強く頷く。

どうにも複雑な表情で顔を見合わせた二人がようやくレスンスプースへ向かうのを見送りながら、どうして自分がこんな目に遭わなければならぬのだろうか、とちひろは深く嘆息するのだった。

「……それにしてもさあ、あのルークに毎日口説かれといて、ちひろもよく落ちないわねえ」

お弁当のミートボールをつつきながら、呆れたように呟く同僚兼友人の立町美里へと胡乱な視線を向けて、ちひろは口の中に運んだばかりの玉子焼きを咀嚼した。

『空いた時間に気軽に通える』を売りにしている事もあり、決まった休憩時間などというものはない。だからローテーションで休憩を取るのが普通だけれど、それぞれの都合を社員同士で調整する事が暗に了解されている。おかげで比較的柔軟に時間を調整できるのが嬉しい。——まあたまに貧乏くじを引いて、お茶の時間になるまで昼食がとれない事もあるのだけれど。

仲のいい者同士で示し合わせて休憩時間を取り、教室から一ブロック離れたところにある小さな公園へと足を運んだ二人は、木陰のベンチでお弁当を広げてゆったりとしたランチタイムを楽しんでいたはずだった。

だというのに、どうしてルークの話題が出てくるのだろう。

「ねえちよつと美里サン？ どうしてあたしが『王子様』に落ちなきやならないのよ？」
 「いや、落ちなきやならない、ってわけじゃないけどさ、あんな美形に熱心に口説かれたら、その気がなくてもちよつとくらいはヨロめいちゃわれない？」

「そりゃ相手が本気ならそうかもだけれど、ルークの場合は違うし」

む、と唇を尖らせて反論すれば美里は、え、と驚いたように目を丸くする。

「違うの？ え、本当に？」

「当たり前でしょーがっ！ だつて冷静に考えてもみてよ。相手はルークよ？ ルークなのよ？ ああ『王子様』が、あたしを本気で好きになるとかあり得ないでしょう!？」

「うーん……まあ、ちひろの言いたい事は分らないでもないけどさあ、でも本気じゃないならどうしてああも毎日あなたに絡むのよ？」

どうにも納得できないと眉根を寄せる美里の言葉に、ちひろは不機嫌に唸る。

「あいつはね、あたしの反応を見て楽しんでるのよ。あなたも言ったみたいに、あいつがコナかけてヨロめかない女の子なんて普通じゃないでしょ？ だから意地になつてるって部分もあるんじゃない？」

「そうかなあ。でもあんまり無理してる風にも見えなないけど……」

「確かに無理はしてないかもだけれどさ、知らない？ あいつ、男の社員だけの場とかだと普通の一般人してんのよ？ あんな言葉づかいもしなけりゃ優雅な『王子様』もしてないの。なのに女性を前にした時だけ『超王子様』とかおかしと思わない？」

「臙脂色の箸を持つ右手で拳を作って力説するものの、美里の反応はどこか鈍い。その反応に、これまで溜まりに溜まっていた鬱憤がとうとう爆発した。」

「それに、あたしに対する態度だつてさ、本当に本気だったらもつと真剣になるはずだと思ふのよ。——そもそもさ、あたしはほら、初めて会った時にちょっと普通じゃない反応しちゃったじゃない？ それが原因で恰好のおもちゃにされてるだけなのよ！」

ちひろにとつてはこれ以上ないくらい明解な論理だつたけれど、どうやら美里にはそうではなかったらしい。彼女はうーん、と唸って首を傾げた。

「言葉については、まあそうかも知れただけさあ。そもそもなんでちひろはそんな風に彼が本気じゃないって断言するわけ？ それに、初対面で普通じゃない反応とか一体何？ 初耳なんだけど」

「う、そ、れは……」

うっかり漏らしてしまった苦い過去に食いつかれてしまい、ちひろは思わずぐつと詰まる。

そこにネタの臭いを嗅ぎつけたのだろう。美里は好奇心たつぷりな目になって、ずずいっと身体を寄せてくる。

「あ、やっぱり何かあったんだ。ほら、話してみなさいよ。そしたらあたしだつてちひろがルークを拒否り続ける理由を、ちょっとくらいは理解できるかもしれないしさ」

言葉はちひろの理解者であろうとしてのものに聞こえなくもない。けれどその表情が、その声が、聞きたい理由の大半は好奇心によるものだという本音をはっきりと告げていた。

た。

「……話すのはいいけどさ、他の人たちには絶対言わないですよ？」

「言わない言わない、絶対言わない。だからさっさと吐きなさいな」

軽すぎる美里の口調に、ちひろは大きな不安を覚える。けれど下手に口を噤めば変な方向に想像を膨らませられそうな予感もひしひしとするのだ。

いらぬ事をべろりと喋ってしまった数十秒前の自分を恨みつつ、ちひろは渋々と語り始めた。

* * *

ルークがちひろの勤める東京本校に配属されたのは一年と少し前の事だ。

元々この手の英会話スクールの講師は、ワーキングホリデーで来日している外国人が多い事もあって、人員の回転が速い。

それ故に同じ教室ですつと教えるのはごく一部のベテラン講師に限られており、勤め始めたばかりで経験の浅い講師などは、いくつもの教室を掛け持ちしてレッスンを多く持つ事で講師としての経験値を上げ、レッスン単位で支払われる給料を増やそうと腐心するのだ。

加えてちひろがいる東京本校はマンモス校である事も手伝って、毎日のようにそういった新人講師が顔を出すのだが、その中でも常勤や準常勤になる講師はほんの一握りだ。

だから、新しい常勤講師が配属され、顔合わせが行われると知らされていた社員たちは、一体どんな人が来るのだろうかと少なからず興味関心を抱きつつ、新講師の初出勤を待ち構えていた。

もちろん全体への挨拶なんてスクールの営業が始まる前の朝礼で行われるのだから、いの一番にその講師と会えるのは早番となった社員のみだ。そしてその日、ちひろも『幸運』な社員の一人として、朝礼が始まるのを自席に着いて待っていた。

朝礼の時間になり、いつもと変わらない連絡・伝達事項の通知や営業目標と実績に対する訓示、それから近々予定されているキャンペーンやイベントについての指示や報告が終わってようやく、当時のスクール長が講師待機室へと新講師を迎えに行った。

そのあまりにもつたやう方に対して覚えた疑念は、しかし彼が待機室から姿を現した瞬間、氷解した。

「……何アレ……マジ？」

そう呟いたのは一体誰だっただろう。

日常の中に現れた、非現実なまでの美貌を誇る青年に、ちひろを含んだ誰もが言葉を

失っていた。

現実離れしているのは遠目にも分かる気品漂う顔立ちだけじゃない。彼の長身を包むのは、どうがんばっても既製品には見えない、彼の細身な身体にびたりとフィットしたグレーのスーツ。真っ白なボタンダウンカラーのワイシャツに幅の狭いブルーグレーのネクタイを合わせ、シルバーのシンブルな細いタイピンをつけていた。驚くほど長い脚は、スタンダードより若干細めのスラックス越しにも、スポーツか何かで鍛えたらしき筋肉の存在を窺^{うかが}わせていた。

呆然として声を上げる事すらできなくなっている社員たちを見渡して、スクール長はどこか気まずげに咳払いをする。その音にみんなが現実へと立ち戻ったのを確認し、彼は淡々と紹介の言葉を口にした。

「本日より当校で常勤講師として勤めてもらう事になった、ルーカス・コーンウェル君だ。カナダのトロント出身で、大学生の頃から現地の英会話スクールで非常勤講師のアルバイトをしていた。そこで知り合った英会話講師の紹介を受けて当スクールに勤める事になった」

ああそれで常勤扱いなのか、と麻痺してしまっている思考の片隅でちひろは一人納得する。

それでもやっぱり、彼のような存在が自分の職場にいるという現実は、まだ受け入れ

られていなかった。

「本来ならあちこちの教室を回ってもらうのがセオリーだが、彼は過去の経験も踏まえて当校で常勤してもらう。もちろん、必要に応じて他校へのヘルプもしてもらうだろうが、基本的にはこのスクールで教える事になる。しばらくは慣れない事もあるだろうから、色々サポートしてあげてくれ」

その言葉に、ばらばらと気の抜けた声が応じる。いつもなら「気合が入つたらん！」と怒号を飛ばすスクール長が、さすがにこの時ばかりは苦笑混じりのため息で終わった。「それじゃあ、本人からも自己紹介をしてもらおうか」

スクール長自身もまだ新講師の存在感に慣れていないのだろう。いつになくぎこちない動きで、一歩下がった位置に立つ青年を振り返り、流暢な英語で挨拶をしてくれと告げる。

イエス・サー、と会釈と共に短く返したのは、見た目から想像していたよりも深く張りのある声で、ちひろはまたしても現実と非現実の狭間に放り込まれたような気になっ

てしまった。「お初にお目にかかります。ただいまご紹介にあずかりましたルーカス・コーンウエルと申します。皆さま方にはぜひ、ルークと気安く呼んでいただきたく存じます。スクール長からの紹介にもありました通り、カナダはトロントに生まれ育ち、この度初めて日

本の地に参りました。何かと不慣れな事もありご面倒をおかけするでしょうが、諸先輩方におかれましては、親しくお付き合いいただけると幸いです」

それは癖も訛りもほとんどない、実に流暢な日本語で、フロア全体をその日二度目の衝撃が襲った。

（な、なんなのこの人!? 日本人じゃないんだよね? なのに何よ今の日本語。今時こんな丁寧すぎる言葉使うなんて、マナー本でもあんまりないと思うんだけど）

ひくり、と引き攣ろうとする表情筋を、奥歯を強く噛み締める事で無理やり抑える。

他の人たちの反応はどうなんだろうかとそろりと周囲を窺ったちひろは、しかしそこに感嘆符やらハートマークやらを大量に見つけ、あまりにもあまりな現実に、激しい頭痛を覚えた。

彼の態度や物言いは、まるでそれが普通であるかのように自然だ。けれど自然すぎるのが、逆に不自然に感じられてしまう。

（ちよつと、どうして誰もおかしいと思わないの? 有り得ないでしょこんな言葉づかい! いくら日本が好きでマニアだったとしても、これはなさすぎるでしょう!?）

確かに外国人で日本の文学に傾倒してしまった人の中には、現代語とはほど遠い言葉を使う人もいる。だが、そういう人たちは大学や大学院で文学を学ぶために日本を訪れるケースが多いから、なかなかこんな英会話スクールで講師をしたりはしないのだ。加

えてそういった人たちは本に書かれている文字を常日頃相手にしているため、発音がどうしても不自然になってしまふ。

けれど彼の日本語には、その言葉づかいを除けばまったくもって不自然さはない。

つまりこの空間にいるちひろ以外の日本人を強烈に惹きつけている彼は、日本の話し言葉に疎いというわけではけっしてなく、意識的にこういった言葉づかいを選んで使っているのだ。それも、他人の耳に自然に聞こえるようになるほどの頻度で。

そこに異常さを感じるのはちひろだけだろうか。

社員の中には、この恵まれた環境にあっても未だ外国人というだけで憧れの目で見ってしまう人も男女を問わずいるようだから、こういった反応も仕方がないのかもしれない。けれどアメリカの大学を卒業してこの業界で長年働いているスクール長ならば、何らかの正常な反応をしてくれるのではないかとわずかな期待を胸に視線を向けた。

……のだけれど、現実には彼女にあまり優しくはなかった。

スクール長はルークの言葉づかいに大した反応も見せず、軽く頷いてこう締めくくつた。

「そういう事だ。とりあえず、今日はこのスクールの様子を見てもらおうと思う。教材や設備についての説明や他の講師への紹介は、いつものように山瀬君にお願いする。あと、君たちからの自己紹介は、折を見て個々に行ってくれ」

以上、の言葉を合図に、案内役である山瀬を除いた社員たちは、ルークへと意識を残しながらも三々五々に自分のデスクへと戻る。

特に女性陣は突然目の前に現れた貴公子に完全に心を奪われてしまっていた。どこか浮き足立って見える山瀬に先導され、二階のレッスンブースへと続く階段に向かう青年をうっとりとした目で追いかけている。その背中が視界から消えた時、あちらこちらから漏れた切ないため息は、きつとちひろの空耳じゃないだろう。

「……本当、ありえないっつたら……」

まだ頭痛の余韻を引きずる頭を振ってパソコンのモニターへと向かったちひろは、それからの数時間、ルークの存在を忘れて日常業務に動しんだ。

人間とは、都合の悪い事はあっさりと言憶から排除できてしまふ、実に都合のいい動物である。

だから本当に、あのおかしなカナダ人講師の事は、ちひろの頭の中から一度は排除されたのだ。

けれどそれも、息抜きのため待機室にある自販機へと向かうまでの事だった。

スクール長が宣言した通り、出勤初日のため授業の割り振られていないルークは待機室で他の講師たちと歓談していた。

彼の姿を見た瞬間、思わず「げっ」と声が出そうになったのをぎりぎり抑え、自分

でもお愛想だとはつきり分かる笑みを貼り付けると、まっすぐに自販機へと向かった。しかしどのジュースを買おうか、と迷ってしまったのが運の尽きで、「失礼いたします」という柔らかな声に洪々と振り返った。

「もし、既にご挨拶しておりましたら、心からお詫び申し上げます。ですが僕はまだ、あなたへは正式に自己紹介してはおりませんでしたね？」

だから、一体いつの時代の何様ですか、と心の中でツッコミつつ、ちひろはこくりと頷いた。

「ええ、そうですけど……」

「ああ、よかった！一度もご挨拶をしないのは論外ですが、一度ご挨拶をした方に対して二度目のご挨拶を申し出るのも礼儀に反しますから。改めまして、僕はルーカス・コーンウェルです。どうぞルークとお呼びください」

まるで計算されつくしているかのような微笑^{ほほえ}みを浮かべ、胸に左手を当てて会釈する。その姿を見た刹那、彼の態度や仕草がどういった類のものか、一気に理解した。

（そうか、これ、『王子様』だ。『王子様』なんだ。つてかこの現実世界に『王子様』とありえなさすぎるし！）

とたん、ぷつんとちひろの中で何かが切れる音がした。

いけない、と思う暇もなくこみ上げた激しい衝動に、抗^{あらが}う事はできなかった。

気がついた時には片手に小銭入れを握り締めたまま、

「——ぶっ！ あは、あ、あはははははははははは！」

全身全霊で、爆笑していたのだ——

* * *

「——って、だからなんでそこで爆笑なの!?!」

信じられない、とばかりにこちらを見つめる美里に、やつぱりあんたもなのねブルータス、と心の中で涙をこぼしつつ反論する。

「いや、だつてさ、シエイクスピアの登場人物が現実世界を闊歩^{かつぽ}してるのを想像してみてもよ！絶対笑うでしょ!」

「でもルークの場合、それが似合ってるから気にならないっていうか」

「いやいやいや、だからそれが似合っちゃうのがおかしいって気づこうよ！本物の王子様方だつて、ナイトクラブでパラッチされる時代なのよ？本物以上に本物っぽいとか、マジないでしょ!」

握る箸を折りかねない勢いで振るつたせつかくの熱弁も、残念ながらルーク擁護派である美里には通じず、逆に可哀想な人を見るような目を向けられてしまう。

(……だから、なんであたしが悪いみたいになっちゃうのよ……)

もういつそ泣くか不貞腐るかグレるかしたくなる。そんな感情のままに唇を失らせて
 首がじと箸を齧り、言い訳がましく続けた。

「だってさ、ルークがああいう事してるのって、周囲の目を意識しての事だと思わない？ そりゃさ、それがサービスピス精神からなのか、それともナルシストだからなのかは
 分かんないけど、不自然な事に違いはないじゃない。それがあたしにはどうしても駄目
 なの。まあ、基本的にあたし自身が少女マンガとかロマンス小説の世界とは相容れない
 てもあるんだろうけど。最近はいいい加減慣れたけど、最初の頃は事あるごとに吹き出
 したり、鼻で笑ったりしちゃってね……」

はあ、と胸の中で渦巻く不満を肺の中から無理やりに追い出す。

「多分、あたしみたいな反応する人って周囲にいなかったんだろうね。初めはちよつと
 不機嫌っぽくなったり『わけが分からない』みたいな顔になってただけでさ、いつ頃
 からか、あたしがそういう反応させる度になんかこう、企み成功、みたいに笑うのに気
 づいて」

「——えーと、ごめん、ルークがそんな顔してるっての？」

「してるよう。あと、あたしに絡む前とかさあ。……みんなあいつの『王子様』スマイ
 ルにしか注目してないから気づいてないみたいだけど！」

お弁当箱の中に一つだけ残していたプチトマトを口へと運ぶ。かしゅ、と弾力のある
 果肉を噛み割ったとたん口の中に広がった甘酸っぱい果汁が、沈みがちなちひろの気分
 をほんの少し軽くしてくれる。うん、やっぱり美味しい食事は重要だ。

「それにさ、さつきも言ったけど、あいつ、ちゃんと普通の日本語も喋れるじゃない？」

「ああ……そういえばそうだよ。あんまり聞かないから忘れてるけど」

「あたしだって、本当に偶然聞いたのを除けば一回もないうって言ってもいいくらい
 よ。——しかもあいつ、あたしがその場にいるって気づいたとたん、口調を元に……っ
 ていうか、あの『王子様』口調にわざわざ戻して『やあ、チヒロさん、ごきげんよう。
 あなたも休憩にいらしたのですか？』なんて言ってる。しかも日本語で女の子に話す時
 には絶対『さん』付けは忘れないって念の入れよう！」

「あー……」

「そこでもう、あたしの中の彼に対する不信度が急上昇。周囲の男連中もその豹変つづ
 りにニヤニヤしてるんだもん。マジむかついて、買うもの買ってささと退散したって
 わけ」

それだけではない。この話には、実は後日談がある。

先的一件から更に数日をおいて、偶然二人きりになる機会があったのだ。

黙っておこうかと思わなくなかった。けれどどうにも我慢できず、「どうしてそん

な口調で喋るのよ？」と問いかけたちひろに、ルークはさも驚いたそぶりで逆に聞き返してきたのだ。いつもと変わらず流暢で『王子様』な日本語で。

「僕の口調に、何か問題がありますでしょうか？」

「問題っていうか、普通の口調で喋れるのに、どうしてわざわざそんな事するのか理解できないの」

「そうでしたか……それは大変遺憾です。僕はただ、皆さんができるだけご不快にならないよう心掛けていただけなのですが……」

悲しげにため息をつくその横顔に、ちひろの胸には苛立ちだけが募る。自分でもはっきり分かるくらい、声が冷たくなった。

「へえ、男の人の前と女の子の前で態度を変えるのが、あなたの気遣いって事？」

びっくりと、ルークのこめかみがひくつくが見えた。冷たい光を放つエメラルドの目がすつと細められる。

（やばっ、もしかして言い過ぎた？ 怒らせちゃった……とか？）

及び腰になる自分自身を叱咤しつっ、ちひろはじつと相手の答えを待った。

「なるほど、君にはそのように見えてしまうのですね。僕自身としては、相手によって態度を変えているという認識はありません。たしかに多少、言葉づかいについては意図的にそうしておりますが。——しかし、分からないな。他の女性たちにはとても好評を

いただいているというのに、どうして君にだけは不評なのでしょう？」

『王子様』らしい柔和な空気が、言葉づかいの揺らぎとともに変化しつっある。

ついさっきまで感じなかった威圧感に、一瞬だけ怯みそうになった。

「ただどこで引いてしまっただけは負けを、ルークではなく自分が間違っているのだと認める事になってしまっ。そう思っただけは、きつ、と視線を投げる。」

「——何よ、あたしが悪いって言いたいのか？」

「いや、そうではない。そういうわけではないのです。その、いかがでしょう、教えてはもらえませんか？ なぜ君が、僕のこういった物言いを嫌うのかを……」

その表情は思っていたより真摯だった。どうやら本気でちひろの意見を求めているように見える。

ほんの少し躊躇して、誤魔化しても意味はないのだと悟ると、ずばりとそれに対する答えを口にした。

「あたしは、相手が女なら誰でもかまわずいい顔する人が好きじゃないの」

「……君には僕がそうだった軽薄な人間であるように見えているのですか？」

「う……や、その、軽薄っていうか、ナンパっていうか……」

駄目だ。言葉を重ねれば重ねるほど墓穴が深くなる。この場合、きつと正しいのは黙ることだ。雄弁は銀だけ沈黙は金というではないか。

思いきり眉間にしわを寄せて黙り込んだちひろを、ルークはしばらくじっと見つめる。けれどどうやらこれ以上ちひろから言葉を引き出すのは無理だと気づいたらしく、ほんの少し雰囲気や和らげて口を開いた。

「なるほど。君の目に僕は、女性にばかりいい顔をする無節操な男として映っているですね」

「そ、そこまでは言っていない！」

ちよつと言い過ぎた、と思っていた言葉をそのまま繰り返され、慌てて否定する。

「ですが、そう思っておられるのでしょうか？」

「……」

「弁明させていただきますと、僕としては、彼女たちの歡心を買いたいからこういった物言いをしているわけではないのです。僕が日本語を学ぶきっかけとなった人と、日本語を教えてくれた人の悪戯心いたづらこころが原因なのです。おかげでこれが普通の日本語ではないと知った時には、とても驚かされたものです」

そつと目を伏せて嘆息するその横顔は、その口から出てくる言葉と妙に調和してまるで一枚の絵のように見えた。うっかり見惚れそうになりつつも、ちひろは偏見を持ってルークを見ていた事に気づきほんの少し後悔する。

「正直なところ、いわゆる正しい日本語を学んだ今となっても、この言葉づかいの方に

慣れてしまっています。何より——」

唐突に、形のいい唇の両端がついと吊り上がる。その豹変に、一瞬思考が止まった。

「言葉づかいや仕事一つで女性に喜んでいただけるのは、僕としても楽しいことだからね。こんな風に嘔みついてくる女性がいるとは思わなかったから多少戸惑いはしたものの……」

ふ、と小さく笑いを漏らし、彼はとても愉たのしげにこう告げた。

「しかし、こんなに分かりやすく反発されるというのも意外性があつてなかなか面白い。——そういつた理由で、僕は今後もこの口調を変える必要性を感じない。チヒロさんには申し訳ありませんが、今後も今の口調を続けさせていただきますよ」

艶やかに微笑ほほえんでこれで話は終わりだとばかりに身を翻ひるしたその背中を、ちひろは呆然と見送るしかなかった。

(本当に、今思い出しても頭にくるったら——！)

「とにかく！ 他の人と違う反応するあたしの存在が珍しいのよ、ルークには。それでああやってあたしをからかって遊んでるの。多分彼にとってあたしはいいオモチャなんだわ！」

その厳然たる事実を掲げて見せる。けれどそれに対する美里の反応は、やはりどうにも手ごたえのないものだった。

「うーん、そう、なのかなあ……?」

「絶っつっ対、そう！ だからあたしがなびくとか落ちるとかいう問題じゃないの。あいつは百パーセントお遊びなんだもん。一々素直に喜んでたらバカ見ちゃう」

休憩時間もあまり残っていない事だし、と食べ終わったお弁当箱を片付けて、ちひろは一人さっさと立ち上がる。

今の気分とはまったく逆の、雲ひとつない青空へと向かってうーんと伸びをする。

その背中の方から聞こえてきた「でもあたし、ルークは結構本気だと思うんだけどなあ」という美里の言葉は、あえて黙殺する事にした。

第二章

英会話スクールの社員の仕事内容は、予約受付業務と営業だけだろうと思われがちだ。けれど実際には結構あれこれしなければならぬ事がある。もちろん通ってくれる生徒さんがいてこそ成り立つ商売だから、接客も重要な仕事の一部分だ。

講師たちの都合に合わせてころろ変わるソフトの作成や、突然の欠勤・遅刻で空いた穴を埋めるための代理講師の手配は特に大変だし、当日の売上伝票の取りまとめだとか営業報告の作成などの事務作業なども、ミスをすればスクール長から大目玉を食らうのは確実なので神経を使う。

それ以外にも生徒さんのカルテをこまめにチェックしたり、講師から生徒さんに伝達事項がある場合はそれをデータベースに入力して、予約やチェックインの際に伝えなければならぬ。

また数ヶ月ごとにフォロアップというカウンセリングが発生する。これはどの能力がどれだけ伸びているのか、どこでつまづいているのかを複数の講師にチェックしてもらって生徒さんに伝えるというもので、彼らの通学モチベーションを維持するためにも

重要な仕事だ。それとは逆に、生徒さん自身から勉強法などについての相談を受ける事も少なからずある。

何よりこういった機会は、ぶっちゃけ教材を売り込む絶好のチャンスでもある。だからきちんと生徒さんのカルテを読み込んだ上での臨機応変な対応が求められる。

それでも、こういった接客や営業に関する仕事は、学生の頃からのバイト経験もあってそんなに苦にならない。

むしろちひろが個人的に苦手としているのは、長く受講していない生徒さんへのご機嫌伺いのがきを書いたり、一度スクールに説明を聞きに来たお客さまへの各種キャンペーンのご案内状書き、そして全生徒さんへの季節のお便り書きだ。

はがきを印刷するだけなら別にかまわないのだけれど、そのすべてに必ず手書きメッセージを入れなければならないため、どうしてもかなりの時間を費やしてしまう。

字が上手いわけでもなければメッセージを考えるのが得意なわけでもない。なのに金太郎飴のように同じメッセージを書く事は上から禁止されていて、各生徒さんのカルテを確認しながら何を書けばいいのだろうかと知恵を絞らなければならない。

加えて、大学に入ってからパソコンでの作業が一気に増え、授業の内容をノートに取るとか試験を受ける以外で手で文字を書く機会は大幅に減ったため、ちひろにとって今やこういった作業はほとんど苦行に近い。

立ち読みサンプルはここまで

定期的に発生するものだから、時間を見つけてはなるべくこまめにノルマをこなすように努力はしているものの、苦手なものは苦手なのだ。

遅番だったその日も職場に到着し、早々に通常業務を終わらせ、いつものように大量のがきと格闘するべく準備を整えていたちひろは、すすつと近づいてきた美里に気づいて手を止めた。

「ねね、あんたさ、もう見た？」

「ん？ 見たって何を？」

「マジで忘れてんの？ 今日から入る新しい人だつて！ ほら、ちょっと前から話あったじゃない。中途で採用されて、今日から現場体験でここ入る事になった人がいるって」

呆れ口調の美里に、そういえばと思いつく。

ちひろたちが勤めるこの英会話スクールでは、たとえ本社の総合職で採用された社員であっても、研修の一環として必ず複数のスクールでの現場体験が義務付けられている。

大抵はサテライト校と呼ばれる比較的規模の小さなスクールに派遣され、約三ヶ月間そこでの業務を学び、それを終えた時点で本来の配属先へと向かう事になる。だが、経営やマーケティングに関わる部署に配属される事が決まっている社員や、スクール長やエリアマネージャーなどの幹部候補は三ヶ月の研修後、更にいくつかのスクールを転々とする場合もある。全国でもトップクラスの規模を持つこの東京本校は、その受け入れ